

豊岡市環境基本計画

TOYOOKA CITY
BASIC ENVIRONMENT PLAN



平成19年4月豊岡市



雲海(来日山)







いってらっしゃい(昭和30年代)

写真提供(モノクロ): 富士光芸社





豐岡盆地遠景

はじめに

自然は、私たちの日々の暮らしの様々な面において大きな恵みを与えてくれます。反面、時には恐ろしい姿となって災害を引き起こし、人々を苦しめます。この地に生きる私たちは、古くからこのような自然と抗うのではなく、むしろ自然に抱かれ、自然と折り合いをつけながら暮らす術を培ってきました。

しかし、人間が自然を大きく改変できる力と技術を持ち、人々が自然に対する畏れを失っていくのと歩調を合わせて、20世紀後半には多くの自然が失われていきました。豊岡を日本最後の生息地としていたコウノトリも姿を消し、地域固有の生活文化も失われていきました。

私たちは、ややもすると傲慢であったのだと思います。

阪神・淡路のあの恐ろしい揺れと2004年の台風23号は、自然の力はあまりにも大きく、人間の力はあまりにも小さいという当たり前の事実を私たちに強烈に思い起こさせました。

このことの反省を踏まえ、豊岡市基本構想では、「自然に抱かれて生きる」ことをまちづくりに臨む基本姿勢の一つに据えました。

その姿勢は、地域固有の自然の中で築き上げられてきた歴史や伝統、文化を尊重する態度へとつながるはずです。

それらは自然との共生戦略であり、穏やかで安らぎに満ちた「終の棲家」をつくるまちづくり戦略であり、新しいものを生み出

す革新戦略であり、そして都市間競争の中での生き残り戦略でもあります。

この環境基本計画は、先人から受け継いだふるさとの自然や歴史、文化を保存、再生、創造し、次の世代に引き継いでいけるよう、取り組みの基本的な考えと手法を示したものです。したがって、「環境」という概念を幅広くとらえ、生活や経済活動など、すべての行動が当たり前のこととして環境を良くすることにつながっていくことをめざしています。

そのため、10年後の目標とする姿をできるだけ具体的に設定し、「やり遂げる」という意思を明確にしました。また、私たちが日々を生活する上で常に意識するものとして、「ばちがあたる」など6つの合言葉を設けたことも特徴です。

市民、事業者、行政、さらには豊岡を訪れた方々がそれぞれの場で、あるいは協力し合って取り組みを進め、一つの行動が人をつなぎ、取り組みの輪が広がっていくように進めてまいりたいと思います。

最後になりましたが、計画の策定にあたり熱心にご審議いただきました豊岡市環境審議会の委員各位、市民環境懇談会等を通じて貴重なご意見、ご提案をいただきました多くの市民・事業者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成19年4月

豊岡市長 中 貝 宗 治

目次

第1章 目標とする姿	10
6つの合言葉	30
第2章 計画の策定にあたって	
1. 計画策定の目的	32
2. 計画の位置づけ	34
3. 計画の期間	34
第3章 計画の基本的な考え方	
1. 基本理念	36
2. 基本方針	38
第4章 取り組みの方向	44
第5章 計画の推進	58
第6章 市民・事業者・市のそれぞれの取り組み(行動指針)	60

資料編

資料1 「目標とする姿」を実現するための展開図	78
資料2 豊岡市環境審議会委員名簿	79
資料3 豊岡市環境審議会等の開催	79
資料4 豊岡市コウノトリと共に生きるまちづくりのための環境基本条例	80
資料5 豊岡市の環境の状況	83

第1章 目標とする姿

コウノトリの野生復帰をシンボルとして、豊岡市全域にすばらしい環境を広げ、将来の世代につないでいくために、この計画で10年後に目標とする姿を具体的に設定します。

01

里山では山の幸もよみがえりました

ペレットストーブなどを利用する家庭が増え、木材が燃料としても売れるようになり、木材の利用が増え、CO₂の削減につながっています。植林された杉や桧は、適切に管理され、伐採の後には広葉樹も植えられて、災害防止や保水能力など森の機能も維持されています。

里山では、地域やボランティア等による

下刈りなどが行われ、タケノコや山菜もたくさん採れます。身近な自然と親しむために、森に入る人が増えたことから、人と動物との適度な距離が保たれ、住み分けできるようになりました。

増えすぎたイノシシやシカは、適切に駆除されて、肉は食材としても供給されています。



良く手入れされた里山(長谷)



松の植林作業



山菜採りを楽しむ子どもたち

02

遊んでいる田んぼを見かけなくなりました

「コウノトリ育む農法」などの農薬や化学肥料に頼らない環境創造型農業が広がりました。安全・安心な農作物がよく売れて、農業に魅力を感じ、就農する若い人も増えています。学校給食や家庭では、食卓に豊岡でとれた安全・安心な食材がよく並ぶようになりました。

田んぼでは、トンボやドジョウなど多様な生きものと触れあう子どもの姿をよく見かけます。

また、農地が様々な使われ方をして、耕作困難な農地がビオトープ水田に活用されたり、菜の花が植えられて、菜種油やバイオディーゼル燃料が生成されています。



コウノトリ育む農法の稲が実る



日高町小河江の棚田



稲刈り体験



菜の花の栽培(日高町上郷)





03

あちこちの川で子どもたちが遊んでいます

市民みんなが協力して、地域ごとに川岸の草刈りをしたり、ごみを拾う取り組みが功を奏し、川がきれいになりました。市民だけでなく豊岡を訪れた人も、川や道路沿いでポイ捨てをしてはいけないという意識が高まり、川沿いのごみは少なくなりました。

農薬などに頼らない農法が広がり、川の水質も良くなって、川にはたくさんの魚が泳ぐようになりました。子どもたちが、川で魚をとったり、水遊びをする姿をよく見かけます。



竹野川での魚とり



04

ごみのない海辺では、子どもたちが「磯遊び」を楽しんでいます

山林の倒木や間伐材、草刈り後の草や田んぼの稲わらなどをそのまま放置すると、台風や大雨のときに、一度に大量のごみとなって流れ、最後は海辺を覆ってしまいます。誰もが、ポイ捨てや不法投棄をしなくな

り、ごみをきちんと処理するようになったので、川から海に流れ、海岸に漂着するごみは少なくなりました。

きれいになった海辺では、子どもたちが、元気よく砂遊びや磯遊びを楽しんでいます。



気比の浜での地引き網



出石お城まつり(子供大名行列)



但東どろんこ祭り

05

子どもたちが地域の祭りや 行事を楽しんでいます

自然に抱かれ、自然と折り合いをつけた豊岡の暮らしから生まれた地域の祭りや、伝統行事のことを、おじいちゃん・おばあちゃんが孫たちに語りかけています。

それを聞いた子どもたちは、家の中で年

中行事の習わしを手伝ったり、地域の祭りに参加して楽しんでいます。地域の誰もが、地域の文化や歴史を心の拠り所にし、さらに関心を持つようになり、それを誇りに感じています。





田んぼで餌をとるコウノトリ

06

コウノトリがすべての中学校校区に住んでいます

「コウノトリ育む農法」が行われている田んぼや、市民に守られた湿地が、市内全域に広がってきました。コウノトリのエサとなる生きものが増え、コウノトリが市内の至るところに飛来して、コウノトリの生息

地が市内全域に広がっています。

コウノトリが舞い降りた地域では、そのことが地域の誇りとなって、さらに、コウノトリも住める豊かな環境づくりの地域の取り組みが進んでいます。



そっと見守りましょう



巣塔上のコウノトリのペア



バイオディーゼル燃料で走行する配送車



ゴミは正しく分別しましょう(地区ゴミステーション)

07

収集されるごみの量は、ピーク時(平成12年度)に比べ25%減りました

家庭で生ごみ処理機が利用され、地区には常設の資源ごみ回収ステーションが設置される所が増えました。その結果、みんなが日常生活を見直し、資源の無駄使いをしないようになり、ごみの量は平成12年度42,798tのピーク時に比べて大幅に減りました。(平成17年度対比で11.5%減)

生ごみからたい肥を作ったり、廃食用油がバイオディーゼル燃料となりディーゼル車で利用されて、資源やエネルギーが地域内で循環するようになりました。

事業者は、発生したごみを再利用したり、燃料として利用するなど、ゼロエミッションの取り組みも進んでいます。



08

子どもが安心して道草をしながら帰ります

地域の環境を良くする取り組みが広がり、通学路沿いの道ばたに花が咲いたり、水路では小魚が泳ぎ、あぜ道ではバッタが跳ねたりしています。山や川・海での体験学習で、自然のことをたくさん学んだ子どもたちは、学校帰りによく道草をするようになりました。

その子どもたちを、家の近くで風景を楽しみながら散歩する人や、商売で行き来する人、農作業をしている人が、地域の中で子どもたちとの絆を深め、見守っています。



いってらっしゃい(昭和30年代)



お帰りなさい(平成18年)





地域ブランドに認定された豊岡鞆

09

たくさんの豊岡ブランドが生まれ、市民みんなが使っています

環境創造型農業で作られたお米や、かばん・ちりめんなど、豊岡で磨き上げられた地域ブランドがたくさん生まれています。作り手のこだわりと地域らしさを生かした商品は、内外からも高く評価されています。

豊岡に住む人は、地元で生産された物を選んで購入し、安心して使うことで、日々の暮らしを楽しんでいます。全国の消費者も、豊岡市民が選んでいるものと同じものを選ぶことに安心感が生まれています。



商店街で地元農産物を販売



アイドリングストップ装置付きの車



太陽光発電パネルを設置した住宅

10

市民みんなが、省エネ行動を楽しみながら取り組んでいます

地球温暖化を防止しようという市民の意識が高まり、CO₂を発生する化石燃料の消費を「ちょっとでも」減らそうとする行動が広がっています。

家庭だけでなく、学校や職場でも、「もったいない」からと冷暖房温度を下げたり、電気器具のスイッチをこまめに切るようになりました。大人も子どもも、省エネルギー

ー行動が当たり前となり、エネルギーの無駄遣いをすると、恥ずかしく感じるようになりました。

また、市内には、住宅に太陽光発電パネルを取りつける人や、ハイブリッド自動車を購入したり、アイドリングストップなどのエコドライブを実践する人も増えてきました。



6つの合言葉

もったいない

物をむだにすると「もったいない」「人から物をもらったりしたら「もったいない」と感謝する意識を持ち、日本人は昔から物をとても大切にしてきました。

ばちがあたる

「ばちがあたる」とは、自然の力などの目に見えない力に対して畏れの念を持つ謙虚な心のことです。環境に負荷を与える行動のブレーキ役を果たします。

ちよつとでも

「やってもムダだ」と考えるのではなく、せめて「ちよつとでも」と人ひとりが自覚して、できることを積み重ねることが大切です。

目標とする姿を実現するために次の6つの合言葉をいつも意識して、日常から環境に配慮した行動を心がけます。

つなぐ

個人や一つのグループ、企業、地域の個々の取り組みでは、実現困難なことでも、他者と「つながる」ことで、大きな成果が得られることが多々あります。

心地よい

「もつたいない」や「ちよつとでも」と行動して成果が出たり、他者とつながったり、自然とふれあいながら日々の暮らしを楽しむことは「心地よい」と感じるでしょう。

自信・誇り

コウノトリと共に生きるまちにふさわしい行動を当たり前のこととしてとっていると、外部からの評価等で自然と自信が付くので、誇りを持って地域づくりに取り組みます。